

---

# T S U B A S A

金城 ユウ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

T S U B A S A

### 【コード】

N 7 3 7 2 C

### 【作者名】

金城 ヨウ

### 【あらすじ】

過去の恋人を忘れられない女と、その背中を押す男のお話。

「裕二！ 裕二！」

泣き叫びながら彼を呼ぶ私、しかし彼は振り返りもせず私のもとから去っていった。

ふっ、と目が覚めた。広いベッドの上で一人。目の端に涙がたまっている。

なんて都合のいい夢。彼が海外に行くときに、差し伸べてくれた手を振り払ったのは私。

あの頃の私は、写真家として食べていくのが夢だった。あれから6年たったが、今でも私は売れない写真家だ。

隣りあったような気がしていたためもりは、意識が覚醒してくると同時に、パツと消え去った気がした。

「さむい……」

毛布を肩まで引き上げ包まる。時計を見るとまだ午前5時過ぎ、今日は日曜日でまだ寝ていられる。

彼は貿易会社の社長の一人息子。もともと私とは釣り合いが取れる人でもなかった。でも私は今でも彼のことが好きで、彼に逢いたいと思う。

もし私に翼があれば、あなたに逢いに飛んで行けるのに……

本当に都合のいいことを考える。もう彼とは恋人同士でもなんでもないのでないのに。軽い自己嫌悪に浸りながら、私は眠りの海に引き込まれていく。

携帯電話の着信音で目が覚めた。

時間は午前9時ちょうど。携帯にはメールが1件届いていた。件名には『逢いたい』とだけ。そして差出人は……

メールを読み終えた私は、ベランダに出て、タバコに火をつけ肺の奥まで吸い込む。

肌寒くなってきたが、今日もいい天気なりそうだ。ひとりでゴロゴロ過ごすのも、もつたいない。

携帯電話を取り出し、私は人懐こい笑顔の男性を思い浮かべる。しばらくして電話に出た彼は、寝ぼけた声で電話に出た。

「はい、水無月みなつきです」

「圭けい、ごめんね。寝ていた？」

電話の向こうで、彼の声が明るいものに変わった。

「大丈夫です。今起きるところでしたから」

「それじゃ、今日、時間が空いていたら付き合ってくれないかな？」

「はい。問題ないですよ」

彼と時間と待ち合わせ場所を約束して電話を切る。もう一度タバコを肺の奥まで吸い込み煙を吐き出した。そして、つぶやく。

「私って最低な女……」

彼女、山口真琴やまぐちまこととの出会いは、いきつけのバーで隣に座ったことがきっかけだった。そのまま意気投合してホテルに雪崩込み現在に至る。

彼女に呼び出されて、映画やウインドウショッピングを楽しみ、食事をして、バーで一杯、そして彼女の部屋で肌を重ねる。そのの繰り返し……1年付き合って、身体の距離は限りなく0（ゼロ）に近いのに、精神の距離は1センチも縮まっていない。

真琴の心は寂しさを抱えていて、ぬくもりを求め。しかし、本当に欲しいぬくもりは僕のものではないことも、知っていた。彼女の心の中に僕は存在しない。見える他の男の影。そして、いつもと様子の違う真琴。

「何があったの？」

僕は彼女から身体を離しながら尋ねた。

「嫌だ。離れないでよ。もつとめちゃめちゃに」

彼女が僕の首に手を回す。だが僕は彼女の耳元でもう一度尋ねる。  
「何があつたの、真琴？」

彼女の瞳を見つめる。そこには動揺の色が見て取れた。宙を舞う視線、どれほどの間そうしていただろうか、真琴が先に折れた。そして見せられたのは携帯電話に届いた1通のメール。

真琴への真摯な想いがつづられたメール。そして、今夜逢いたいと…… 時間は午後8時。今の時間は午後7時45分。だが、メールの相手は閉店まで待つと……

「この人だよ。真琴さんの心に居る人？」

「うん」

「何故、行かないの？彼も待っている」

真琴の顔が辛そうに歪む。

「6年前、私が彼の手を離れた。いまさら、一緒に行きたいって、どんな顔して言えるの？ そんな都合の良いこと」

真琴の顔は今にでも泣き出しそうだ。いや、もう目の端には涙が浮かんでいる。

「でも、真琴は6年も彼を想っている。真琴も逢いたいのだろう？ 逢いたくて、逢いたくて」

「そうよ！ 彼に逢いたい。それこそ、翼があれば、彼のところに今すぐに行きたい。って、何年も想ってきた」

僕は真琴に微笑んだ。そして、ベッドの上から降りる。少し距離をとって離れて見る真琴は、今にも折れてしまいそうだ。

「あるじゃないか、翼。その逢いたいという想いが、立派な翼だよ」  
真琴は口に手を当てて、黙り込む。その瞳からは零れ落ちる涙。  
「過去のこととか、そんなゴタゴタは、僕において行きなよ。抱えていくのは、逢いたいという想いだけでいい」

僕は泣く真琴を抱きしめた。これが最後だ。もう彼女は、僕の手の届かないところに行ってしまふ。重荷は僕が引き受けた。後はそ

の翼を広げて、飛び立つだけ、必要なのはひとかけらの勇氣。

「圭、ごめん。ごめんね」

「うん。さようなら真琴」

1時間後、行きつけのバーに僕は居た。真琴と出会ったバー。

「マスター、次はザ・マツカラン」

マスターは、何も言わずグラスにウイスキーをついでくれた。今日あったことを吐き出して、少しは気持ちが悪くなった。

「愛しのロクサーヌですね」

愛しのロクサーヌ。確か、詩才のある一流剣士、シラノ・ド・ベルジュラックの話だったと思う。彼は鼻にコンプレックスがあつて、美しい従妹いとこのロクサーヌに恋したが、自分の醜さを自覚するゆえに告白することができない。

しかし、ロクサーヌは彼の友達でもある美男子クリスマスチャンに一目惚れ、彼は自分の想いを押し殺して、二人の仲を取り持つ役に徹する。という話だったと思う。

「そんな純な話じゃないよ」

そう、自分に自信があれば、真琴を手放さなかった。俺が幸せにする。だから、昔の男のことは忘れろと……言えなかった。そう言ってしまうには、真琴の想いを知りすぎた。

携帯電話が着信を告げる。見ると真琴からのメール。中身は一言「ありがとう」とだけ。

上手くいったらしい。僕は携帯電話の中から、真琴の番号とアドレス、そして届いたメールをすべて削除した。

「さようなら真琴。幸せになれよ」

そうつぶやき、僕はグラスを掲げてみせた。

(後書き)

ちよつと、悲恋を書いてみたくなって、書いて見ました。  
てか、水無月くん格好つけすぎだ(笑  
もっと、人間的な弱さを書いたほうが良かったらどうか(汗

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7372c/>

---

T S U B A S A

2009年7月1日21時18分発行